

反原発・東北復興支援と交流の旅 (9月23日～26日)

被災者は孤立させない! 13道県33人が参加

福島、宮城、岩手3県を巡る「反原発・東北復興支援と交流の旅」が9月23日から26日まで全日本年金者組合主催で行われ、北海道から佐賀までの13道県から33人が参加しました。一行は、被災3県の各県本部・支部の役員ら12人から被災地の案内と説明を受け、交流を深めました。以下は、吉鶴学『年金者しんぶん』編集委員の報告です。

倒壊家屋は放置 人見えず 福島

バスは雨のなかを定刻に福島駅西口をスタートし、いまま全村民の避難が続く飯舘村へ向かいました。車窓から見える田んぼは、雑草で覆われたままです。

地震発生時、南相馬市の「道の駅みなみそうま」にいた伊藤幸雄さんは、振り返ります。

「2回目の揺れで、陳列してあった棚の商品が散乱して店内はメチャメチャになりました。予定を変更して、急いで福島に帰ったので無事でしたけど、そうでなかったら津波にさらわれたかもしれません」

この4月まで立ち入り禁止区域だった南相馬市の小高区。いまま不通のJR小高駅前の自転車置き場には、大量の自転車が置かれたまま。倒壊した家屋もそのまま、人の姿は見えません。

「東北3県支援のための事業」を利用しようと申し込んでから参加した静岡県藤枝市の臼井勝夫さんはいいます。「6月議会で決まった市の支援事業を来る直前に知りました。帰って報告書を出せば、一人約1万円の補助が出ると思います。10月までの事業ですが、いろんな形の支援が各地で広がればいいですね」。



南相馬市・JR常磐線「小高」駅前に置かれたままの自転車 (福島県)

大川小学校前 全員で献花 宮城

石巻市では被災した組合員から、直接話を聞きました。その一人、説田俊子さんは、出かける予定が30分遅くなったので助かったといいます。「自分の家があった場所にしばらくは立つこともできなかった。同級生の遺体はまだ見つかりません」。住宅地には壊れた携帯電話と子どもの靴が片方だけ残っていました。秋風に揺れて可憐に咲くコスモスが悲しみを誘います。

説田さんは「息子の家に住んでいます。2階のあそこにへそくりを隠していたのにと、時どき夢にでます。いまは仲



大川小学校被災学童らの墓前に献花する参加者たち (宮城県)

間に支えられて生きています」。

多くの児童が亡くなった大川小学校前では、全員で献花しました。

今回の旅には母子や姉弟で参加の人も。佐賀県唐津市の藤井昌子さんはダウンしたら、弟に世話を頼んでの参加。「川崎市に住む弟とは10歳違いで、幼いときは私がおぶったので、こんどは私がおぶってもらう番」と明るく話します。「“百聞は一見にしかず”です。帰ったら黙れといわれるまで話して歩きたい」。

地元は明るく 元気で前向き 岩手

釜石市と大槌町の案内役は、釜石支部の中川淳委員長でした。同支部では組合員3人が犠牲になり、家屋の全壊・半壊も14軒に。中川さんの家屋も全壊しました。

「堤防ができて海が見えなくなり、海と家との距離が分からなくなっている」と中川さん。

幼いときから「津波がきたら逃げろ」と、親に教えられて育った中川さんは「着る順序に衣類をたたみ、枕元に置いて寝るのを習慣にしてきた」そうです。

復旧・復興は遅々として進んでいない感じですが、地元で活動する組合員の一人ひとりには明るく元気で前向きです。

「被災者を孤立させないことが大切」と話す千葉信子さんは、この8月に山梨県・北杜支部の年金者組合に入ったばかり。被災地行きを計画中に「年金者しんぶん」を見ての参加でした。

「被災者の方々が、こういうことで困っているので、何々を支援して欲しい、というのがわかるネットワークができるといいと思いました。見たことを自分だけのものにしないで、帰ったら回りの人に話したいです」



巨大堤防を津波は軽々越えていった（岩手県）